

## 『萬葉集』の言こと

—— 詩歌の本質 ——

森田 孟

詩歌が言葉によつて世界を形象化する言語行為であることは言うまでもない。『萬葉集』には、「言こと」なる語が言葉や言葉の成果としての歌文・詩、人の噂、評判、世間の取り沙汰などを表わして種々様々に出現し、「言こと」がどうする、どうある、という表現がその世界を豊富に彩つていて印象深い。

この歌集では、上記の意味での「言こと」がしばしば「事」とも表記されるが、それも古代の東西を問わぬ言霊信仰などを持ち出すまでもなく、「言こと」は往々にして即、「事」でもあり、この両者は語源上同根と見られる事からも不思議ではない。「言こと」が即「事」になるのは、何も古代に限らない。言葉として口に出したら、その表す内容がそのまま事実になるなどという信仰こそ、現代人はまず持たないが、現在でも、口に出す言葉が、その途端にでも、人間同士の愛憎を始めとして様々な関係を、実際の事柄、事態として、大なり小なり現出させたりその切つ掛けとなることは何も珍しくない。口に出すべきでない言葉や表現は、何時の時代どこの社会にも厳として存在し、失言という言葉も行為も実在する。その意味で「言霊」は現今でも生きていると言つてよいが、言霊信仰が浸透していた時代に「言こと」が「事」でもあったのはむしろ当然であり、『萬葉集』では「こと」が「言こと」と「事」を同時に表わし、この両者の峻別が容易でない場合も少なくないが、本稿では、「こと」が、現在「事」で表わす事柄、事態、事象ではない「言こと」を表わしていると思われれるものに焦点を絞つて、その実態を整頓して眺めてみたい。

本稿も、西本願寺本萬葉集を底本として、竹柏會複製西本願寺本萬葉集を使用するが、その校訂・改訂、及びその訓みと読み下し表記については、新編日本古典文学全集『萬葉集』(一)～(四)（小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳）小学館（一九九四年～九六年）——以下本稿では(四)と略記——に原則として依拠する。以下の文中、例えば、②一一三、は、巻二の一三番歌という意味である。表の中の「言」の欄は、「言」の姿を、現代の表記で示し、引用表現は、「言」の（前後の）部分のみを原文で、表音表記のものは、かな、で記すことにする。

卷		表		現			
歌番号	言	表	現	歌番号	言	表	現
一一三	御言	君が御言を持ちて通はく		四三六	人言	人言の繁きこのころ玉ならば	
一一四	言痛し	片寄りに君に寄りな事痛くありとも		四四五	告ぐ	玉梓の事だに告げず去にし君かも	
一一六	人言・言痛し	人事を繁みこちたみ己が世に		四六〇	人言	新羅の国ゆ人事を良しと聞かして	
一三五	言さへく	石見の海の言さへく辛の崎なる		四七五	逆言・狂言	栄ゆる時に逆言の狂言とかも	
一六七	朝言	みあらかを高知りまして明言に		四八一	果たす	結びてし事は果たさず	
〃	御言・問ふ	御言問はさず		〃	問ふ	験をなみと辞問はぬものにはあれど	
一八四	召す言	昨日も今日も召言もなし		五一二	成す	そこもか人の我を事成さむ	
一九六	日言	あぢさはふ日辞も絶えぬ然れかも		五三四	問ふ	明日行きて妹に言問ひ我がために	
一九九	言さへく	いまだ尽きねば言さへく百済の原ゆ		五三七	清し	事清くいたくもな言ひそ一日だに	
三二二	思ほす	歌思ひ辞思ほしし湯の上の		五三八	人言・言痛し	他辞を繁み言痛み逢はざりき	
三三九	宜しき	古の大き聖の言の宜しき		五三九	人言	遂げむと言はば人事は繁くありとも	
四二〇	逆言	玉梓の人そ言ひつるおよづれか		五四一	人言	この世には人事繁し来む世にも逢はむ	
〃	狂言	我が聞きつる狂言か		五四六	問ふ	外のみ見つつ言問はむよしのなければ	
四二一	逆言・狂言	逆言の狂言とかも高山の巖の上に		〃	寄す	天地の神抵辞因せて	
四三一	言のみ	遠く久しき言のみも名のみも我は		五八三	告げ来	我が思ふ人の事も告げ来ぬ	

六〇二	問ふ	見し人の言問ふ姿面影にして	7	一〇九六	知る	古の事は知らぬを我見ても
六二六	繁し	君により言の繁きを故郷の明日香の川に	6	九七二	言挙げ	千万の軍なりとも言挙げせず
六三〇	人言	人事の繁きによりてよむころかも	5	一〇〇七	問ふ	言問はぬ木すら妹と兄とありといふを
六三七	問ふ	我が身は放けじ事問はずとも	(	一〇九	寄す	君が手取らば言縁せむかも
六四七	繁し	人の事こそ繁き君にあれ	5	一一三	言挙げ	激ち行く走井の上に事上げせねども
六五六	慰 <small>なぐさ</small>	恋ふと言ふことは言のなぐさそ		一一三二	あり	夢のわだ事にし有りけり現にも
六五九	人言	あらかじめ人事繁しかくしあらは		一一四九	あり	昨日見し恋忘れ貝事にし有りけり
六六〇	中言	人の中言聞きこすなゆめ		一一七三	通ふ	丹生の川事は通へど舟そ通はぬ
六六一	愛しき言	恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき事		一一九三	許す	妹の山事聴せやも打橋渡す
ク	尽くす	尽くしてよ長くと思はば		一一九七	あり	海人の言ひし恋忘れ貝言にし有りけり
六七四	言ふ	をちこち兼ねて言は五十戸常		一二一一	問ふ	目のみだに我に見えこそ事問はずとも
六八〇	中言	けだしくも人の中言聞かせかも		一二一三	あり	名草山事にし在りけり我が恋ふる
六八三	謂ふ言畏し <small>かたじけなく</small>	謂ふ言の恐き国そ				
六八五	人言	人事を繁みや君が二鞘の家を隔てて				
六八九	日言	日言をだにもここだ乏しき				
七一三	人言	垣穂なす人辞聞きて我が背子が				
七二七	あり	醜の醜草事にしありけり				
七三〇	繁し	なにすとかその夕逢ひて事の繁きも				
七四〇	言のみ	事のみを後も逢はむとねもころに				
七四六	言絶えて	生ける代に我はいまだ見ず事絶えて				
七四八	人言言痛し	何せむに人日他言辞痛み我せむ				
七七三	問ふ	事問はぬ木すらあぢさゐ				

一二五八	一二一三 一三二九 一三四三 一三六三 一三七六 一三八八 一四〇八	8	8	7	9	10	10	9	11	
慰・聞く	成す 成す 言痛し 絶ゆ 成す 繁し 狂言・逆言	羨し	通ふ 繁し 告げ遣る	隠る 持つ 繁し 繁し	成す 成す 言痛し 言痛し 片枝は さ丹つか 寄する 狂語か	あり 通ふ 下延ふ 横言	言問ひ 出づ 繁し 繁し 言痛し 愛し	先立つ 人言 告ぐ 告ぐ 告ぐ 告ぐ	繁し 人言 繁し 繁し 繁し 繁し	言告げ 繁し 繁し 繁し 繁し 繁し 繁し
黙あらじと事の名種に云ふ言を聞き知らくは辛くはありけり	下に着て上に取り着ば事成さむかも弦著けて引かばか人の我を事成さむ事痛くはかもかもせむを岩代の片枝はいまた含めり言な絶えそねさ丹つかばそこもか人の我を言成さむ寄する波辺に來寄らばか言の繁けむ狂語か逆言かこもりくの泊瀬の山に	鳴く鹿の事乏しかも我が心夫とをらふ見れば古の事そ念ほゆる相とぶらひ言成りしかばかき結び聞くなゆめとそらくに堅めし事を我が妻に他も言問へ	事繁き里に住まずは今朝鳴きし雁にほととぎす言告げ遣りしいかに告げきや風雲は二つの岸に通へども我が遠妻の事そ通はぬ	百種の言を隠れる凡ろかにすな百種の言持ちかねて折らえけらずや事繁み君は來まさすほととぎす汝だにほととぎす言告げ遣りしいかに告げきや	たらちねの母の命の言に有らば心さへ消え失せたれや言も往來はぬなかなかに辞緒下延へ逢はぬ日の垣ほなす人の横辞繁みかも逢はぬ日うぐひすの事先き立ちし君をし待たむ人言は夏野の草の繁くとも行く舟の過ぎて來べしや事も告げなむ嘆かず妻に事だにも告げにぞ來つる恋しらに事だに告げむ妻問ふまではただ今夜逢ひたる見らに事問ひも言に出でて言はばゆゆしみ朝顔の紐解くものを事繁み丸寝そ我がする色葉にも出でじと思へば事の繁けくこちたくも天つみ空は曇らひにつつ我が背子が言愛しみ出でて行かば玉梓の道行き人の事告げもなき我妹子を日に日に來れば事の繁けく頼みたる君によりては事繁くとも言に出でて言はばゆゆしみ山川の人事はしましそ我妹綱手引く海ゆ我が思ふ妹が事の繁けくしのびて君が事待つ我ぞ	今日のみはめぐしもな見そ事も咎むな	今日のみはめぐしもな見そ事も咎むな	今日のみはめぐしもな見そ事も咎むな	今日のみはめぐしもな見そ事も咎むな	今日のみはめぐしもな見そ事も咎むな
一七五九	一七四〇	一六一一	一五二一 一五一五 一五〇六	一四五六 一四五七 一四九九 一四九六	一七九二 一七九三 一九三三 一九八三 一九九八 二〇〇六 二〇一一 二〇六〇	二四三二 二四三八 二四三九 二四四〇	二二七五 二二七五 二三〇五 二三〇七 二三二二 二三三三 二三三三 二三三三	二七九二 二七九三 一九三三 一九八三 一九九八 二〇〇六 二〇一一 二〇六〇	二二七五 二二七五 二三〇五 二三〇七 二三二二 二三三三 二三三三 二三三三	一七九二 一七九三 一九三三 一九八三 一九九八 二〇〇六 二〇一一 二〇六〇

二四九二	速し	いや早に事を急みかいかや逢はざらむ	二七九七	持つ	実なき言以ち我恋ひめやも
二四六六	空言	小野に標結び空事をいかなりと言ひて	二七九九	人言	人事を繁みと君を鶉鳴く
二五〇六	言霊	事霊の八十の衝に夕占問ふ	二八一	聞く	この言を聞かむとならしまそ鏡
二五一六	問ふ	しきたへの枕は人に事問へや	二八四八	繁し	夢にだになにか人の事の繁けむ
二五二四	通ひ	名は立ため事の通ひになにかそこ故	二八五二	人言	人言の繁き時には我妹子し
二五三五	言痛し	我が故に人に事痛く言はれしものを	二八六六	誰が言	人妻に言ふは誰が事す衣のこの
二五六一	人言	人事の繁き問守りて逢ふともや	二八七一	誰が言	紐解けと言ふは孰が言
二五七六	繁し	なほ我が上に事の繁けむ	二八七二	人言	人言の譏しを聞きて
二五八一	多し	我妹子を相見しからに事そさだ多き	二八八六	人言	いや増しに人言繁く聞こえ来るかも
二五八二	言ふ	言に云へば耳にたやすし	二八八八	人言	他言はまこと言痛くなりぬとも
二五八二	狂言	あづきなく何の狂言今更に	二八九五	言葉	世の中の人の辞と思ほすな
二五八六	童言	小童言する老人にして	二九一二	人言	人言を繁み言痛み我妹子に
二五八六	人言	人事を茂みと君に玉梓の使ひも遣らず	二九一五	言咎め	人の見て事害目せぬ夢に我今夜至らむ
二五九一	人言	人事の茂き問守ると逢はずあらば	二九一八	あり	しすがにかけまく欲し言に有るかも
二六二一	繁し	現にはいづれの人の言か繁けむ	二九二二	言挙げ	言挙げせず妹に寄り寝む
二六四七	日言	遠みこそ日言離るらめ絶ゆと隔てや	二九三三	人言	人言を繁み逢はずて恋ひ渡るかも
二七一二	疾し	言急くは中は淀ませ水無し川	二九三四	問ふ	携はり事問はなくも苦しかりけり
二七二八	繁し	我が思ふ妹が言の繁けく	二九三八	人言	人言を繁み毛人髪三我が背子を
二七五五	空言・待つ	空事も寄そりし君が辞をし待たむ	二九四四	人言	人言を繁みと妹に逢はずして
二七六八	言痛し	白菅の知らせむためと乞痛かるかも	二九五五	通ふ	月まねく離れにし君が事の通へば
二七七〇	待つ	いつもいつも人の許さむ言し待たむ	二九五八	言咎め	人の見て言害目せぬ夢にだに止まず
二七八二	待つ	沖つ藻のなびきし君が言待つ我を	二九五九	絶ゆ	現には言も絶えたり夢にだに継ぎて

13		12	
三二五〇	言挙げ	三二五〇	言挙げ
三二五三	言挙げ	三二五三	言挙げ
三二七九	言霊	三二七九	知る
三二八四	忌み	三二八四	故
三二八八		三二八八	
うつせみの常 <small>こほ</small> と思へども しらかつく木綿 <small>ゆふ</small> は花物事こそば 小野に標結 <small>ひ</small> ひ空言も逢はむと聞こそ 真葛原何の伝言直 <small>ただ</small> にし良けむ 心あれば年をそ来経 <small>た</small> る事は絶えずて 片思ひに我が思ふ人の言の繁けく 人言の繁きによりて淀むころかも 人言の繁くしあらは君も我も絶えむと 言のみを堅く要ひつつ逢ふとはなしに 人の言こそ繁き君にあれ 我妹子に言問はましを今し悔しも 風のむた雲の行くこと言は通はむ しばしば君を言問はじかも 神からと言挙げせぬ国然れども 我は事上げす 神ながら事挙げせぬ国 然れども 辞挙げぞ我がする言幸く 百重波千重波にしき言上げす我は 大和の国は事霊の助くる国ぞ 君越ゆと人にな告げそ事はたな知れ 妹によりては言の禁もなくありこそと 君によりては言の故もなくありこそと			

14		13	
三四五六	言の上	三三三九	誰が言 <small>い</small> ・勞 <small>らう</small> し
三四六四	人言	三三七一	言出
三四六六	出づ	三三八〇	絶ゆ
三四八二	言痛し	三三九八	絶ゆ
三四九七	出づ	三三三九	誰が言 <small>い</small> ・勞 <small>らう</small> し
三五〇一	絶ゆ	三三三六	言伝 <small>つ</small>
三五一〇	問ふ	三三三四	狂言
三五二五	延 <small>は</small> ふ	三三三三	狂言
三五四〇	問ふ	三三三二	問ふ
三五四〇	問ふ	三三二九	満つ
三五四〇	問ふ	三三二四	問ふ
行き触れし松を言問はぬ木にはありとも 天地に言を満てて恋ふれかも 斎 <small>い</small> 渡るに狂言か人の言ひつる我が心 狂言か人の言ひつる玉の緒 <small>お</small> の 思ほしき言伝てむやと家問へば 泣く子なす言だに語 <small>と</small> はず 誰が言を勞しとかも 我が下延をこちでつるかも 風を疾み綱は絶ゆともことなたえそね 人皆のことはたゆとも埴科の石井の 手児がことなたえそね ささら萩 <small>せき</small> あしとひと語りよらしも うつせみのやそことへのは繁くと も争ひかねて我をことなすな ひとこととしげきによりてまを鷹の まかなしみ寝ればことにつさ寝なへば 逢はなへば寝なへのからにことたかりつも さ寝さ寝てこそことにでにしか 引かばぬるぬるあをことなたえ 妹にことどひ明日帰来む 児ろが上にことをろはへていまだ寝なふも 赤駒が足掻きを速みこととはずきぬ			

<p>18 四〇九四 四〇三一 四〇〇八 四〇〇一 四〇〇六</p>	<p>17 四〇九四 四〇三一 四〇〇八 四〇〇一 四〇〇六</p>	<p>17 三九五七 三九六二 三九六九 三九六九 四〇〇六</p>	<p>16 三七八一 三七八一 三七八一</p>	<p>15 三七八一 三七八一 三七八一</p>	<p>15 三六四〇 三六七六 三七四三 三七四三 三七六三</p>	<p>14 三五五二 三五五六 三五五六</p>
<p>言立て 官<small>つかさど</small> 言立て 立つ</p>	<p>太祝詞言 告ぐ 出づ 御言持つ</p>	<p>逆言・狂言 言伝つ 通ふ 問ふ</p>	<p>御言 御言 尽くす</p>	<p>優す 易し 易し 易し</p>	<p>告げ遣る 告げ遣る 告げ遣る 告げ遣る 告げ遣る</p>	<p>人言 人言 人言</p>
<p>世の人の立つることだて</p>	<p>人の祖の立つる辞立て 言ひ継げることのつかさそ</p>	<p>我が待ち問ふにおよづれのたはことかも 思ほしきことつてやらす恋ふるにし 思ほしきこともかよはず 朝去らず逢ひてことどひ 天皇の食す国なればみこともち 乱るる心ことにいでて言はばゆゆし 醜つ翁のことだにも我にはつけず 中臣のふとのりごとと言ひ蔽へ 顧みはせじとことだて</p>	<p>たらしねの母の御事か</p>	<p>人の子の事も尽くさじ我も寄りなむ さにつらふ君が三言と</p>	<p>旅といへばことにそやすきすすもなく 旅といへばことにそやすきすすもなく 旅といへばことにそやすきすすもなく 旅といへばことにそやすきすすもなく 旅といへばことにそやすきすすもなく</p>	<p>さわゑ浦立ちまひとこと思ほすなもろ さ寝つればひとことしげし 刈り薦の乱れて思ふことつけやらむ 奈良の都にことつけやらむ 旅といへばことにそやすきすもなく 旅といへばことにそやすきすもなく 旅といへばことにそやすきすもなく 旅といへばことにそやすきすもなく 旅といへばことにそやすきすもなく</p>
<p>四四〇八 四四〇八 四四〇八 四四〇八 四四〇八</p>	<p>四三九八 四三九八 四三九八 四三九八 四三九八</p>	<p>四二四三 四二四三 四二四三 四二四三 四二四三</p>	<p>四二一四 四二一四 四二一四 四二一四 四二一四</p>	<p>四二二一 四二二一 四二二一 四二二一 四二二一</p>	<p>四一六九 四一六九 四一六九 四一六九 四一六九</p>	<p>四一二四 四一二四 四一二四 四一二四 四一二四</p>
<p>尽く 言問ひ 言問ひ 言問ひ 言問ひ</p>	<p>問ふ 申す 家言 言葉 通ふ</p>	<p>繁し 返り言 神言 狂言・逆言 伝言</p>	<p>通ふ 通ふ 通ふ 通ふ 通ふ</p>	<p>くすはしき言 くすはしき言 くすはしき言 くすはしき言 くすはしき言</p>	<p>問ふ 御言 御言 御言 御言</p>	<p>寄す 言拵げ 語らふ 言問ひ 言問ひ</p>
<p>君に語らむことつきめやも</p>	<p>今日だにもことひせむと惜しみつつ</p>	<p>合ひてしあらばこともかゆはむ 言ひしけとばせ忘れかねつる 我妹子がいへごと持ちて来る人もなし 母父にことまをさずて今ぞ悔しけ 愛し母にまたこととはむ むせひつつ言語ひすれば</p>	<p>早渡り来て還り事奏さむ日に 辞繁み相問はなくに梅の花</p>	<p>道來る人の伝て言に我に語らく 狂言か人の言ひつる逆言か 斎く祝が神言と行くとも来とも</p>	<p>ますらをの語勞しみ父母に申し別れて 山川隔り風雲に言は通へど</p>	<p>天地の神ことよせて かくしあらばことあげせずとも稔は榮えむ 思ほしきこともかたらひ 秋にしあらねばことひの乏しき見ら 言とはぬ木すら春咲き秋付けば かくはしき親の御言朝夕に聞かぬ日 くすはしき事と言ひ継ぐ</p>

四四六五	向く	ちはやぶる神をことむけ	四四六五	空事	心思ひてむなことも祖の名絶つな
ク	立つ	祖の職とことだてて			

\*

集中三十一回も現われる「人言」始め、興味深い色々な「言」を、五十音順に整頓してみよう。括弧内は提出とは異なる場合の原文。

**朝言** ②一六七（明言）。朝早くものを言うこと。草壁皇子は「毎朝舍人たちに親しくねぎらいの言葉をかけられる習慣があつたものか」因。

**家言** ②四三三三（伊倍其登）。家族の者からの伝言。

**逆言** ③四二〇（於余頭礼）、四二一、四七五。⑦一四〇八。⑩三九五七（於余豆礼）。⑪四二二四。人を惑わす意図から出たでたらめな言葉。この六回とも「狂言」と一緒に使われる。

**狂言** ③四二〇、四二一、四七五。⑦一四〇八（語）。⑪二五八二。⑬三三三三、三三三四。⑰三九五七（多波許登）。⑱四二二四。発狂して口走る言葉。逆言と共に人の訃報など思いがけない知らせに驚く場合が多い因。

両者を並べて使用する六回のうち「逆言」が先に来るのが四回。

**返り言** ⑱四二六四（還事）。返事、復命。

**神言** ⑱四二四三。文字通り神の言葉。

**伝言** ⑫三〇六九。⑱四二二四。伝言である。万葉人は消息などを持って人と人との間を往来する人のことを「間使い」と呼んだ。集中、⑥九四六、⑨一六九八、⑩二三四四、⑪二三八八、⑰三九六二、三九六九、の六回



登場する。

中言<sup>なかこ</sup> ④六六〇、六八〇。「Macagoto ある人についてその人と他の人との仲を割くために言われる言葉」(日

葡辞書) —— ①四。

人言<sup>ひとこと</sup> ②一一六(人事)、③四三六、四六〇(人事)、④五三八(他辞)、五三九(人事)、五四一(シ)、六三

〇(シ)、六五九(シ)、六八五(シ)、七一三(人辞)、七四八(他言)、⑩一九八三、⑪二四三八(人事)、二五

六一(シ)、二五八六(シ)、二五九一(シ)、二七九九(シ)。⑫二八五二、二八七二、二八八六(他

言)、二八九五、二九二三、二九三八、二九四四、三一〇九、三二一〇。⑭三四四六(比登其等)、三四六四(比

登其登)、三五五二(麻比登其等) —— 「ま」が付いている。三五五六(比登其等)。他人の言葉、人の噂、世

間の評判である。殆どが、「繁し」「言痛し」と連結して使われ、「人目」まで一緒に用いられる④七四八、まで

あつて、人目や人の口の煩さに悩まされることの多い社会であつたことが窺われる。「人言」という「讒し」――

――他人を陥れるために事実無根の悪口を言う意のヨコスの名詞形①――を真に受けて、道でさえ避けて顔を合

わせないと云つた恋人を嘆く名作「人言の讒しを聞きて玉梓の道にも逢はじと言へりし我妹」⑫二八七一、もあ

る。「人の言こそ繁き」④六四七、「人の言しみ」(人の噂が高い)④七八八、「人の言こそ繁き」⑫三一一四、な

ど「人の言」も「人言」と同じであり、「言ふ」だけで「とやかく言い騒ぐ」意を表現する作品も、

「をみなへし佐紀野に生ふる白つつじ知らぬこともて言はれし我が背」⑩一九〇五

「我が故に言はれし妹は高山の峰の朝霧過ぎにけむかも」⑪二四五五

などあつて狭い世界が分る。

「人言」「人の言」が盛んで煩しいという作品は、巻四(三〇九首)に十首、巻十一(四九〇首)に五首、巻

十二(三八〇首)に十一首、である。「ひとこと」の原文は「人言」が十一回、「人事」が十二回で殆同数である。

現代の「ひとこと」――自分には無関係な他人の事、よそさまの事――への意味の変遷については安易な推測

は慎むが、心理の面から考えると誠に面白い。他人が口にし合う自分についての噂(人言)は、自分には無関係

な他人事だと、無視するのが一番面倒が少ない。「人言」は卷十四までにしか出現しない。

太祝詞言 ①⑦四〇三一。「のりと」を褒めた語。

御言 ②一一三、一六七、⑩三八一一（三言）、三八一一（御事）、①⑦四〇〇六（美許登）、①⑨四一六九。天皇

や親、母、など相手の言葉を尊敬して言うもの。特に天皇の命令は

大御言 ⑤八九四（勅旨、大命）と言う。

空言 ①①二四六六（空事）、二七五五（ク）、①②三〇六三、②④四四六五（牟奈許等）。無意味な言葉、でまかせ。

目言 ②一九六（目辞）、④六八九、①①二六四七。目で見、耳で聴くこと、対面することと言葉を交わすこと。

横言 ⑨一七九三（横辞）。離間目的の中傷で、「繁みかも」と結びつけて用いられている。

童言 ①①二五八二（小童言）。幼児の無内容な言葉、子供じみた言葉。「狂言」と並べて使われている。

その他、「召す言」（呼び出し）②一八四。「謂ふ言」（うっかり言葉を出すこと）④六八三。「愛しき言」（事

（優しい言葉）④六六一。「堅めし言」（堅目師事）（堅く言葉で誓うこと）⑨一七四〇。「くすばしき言」（久須

婆之伎事）（不思議な珍しい話）①⑨四二二一。あるいは「誰が言」（事）（孰が言）（誰の・どなたの言葉）④七七

六、①②二八六六、①③三三三九、などがある。なお

言靈 ⑤八九四、①①二五〇六（事霊）、①③三二五四（事霊）も無論存在する。言葉に宿っていると信じられた

不思議な霊力圍 のことである。

\*

「言」は如何ように使用されているだろうか。

言挙げす ⑥九七二、⑦一一一三（事上）、①②二九一八、①③三二五〇、三二五〇（事上）、三二五三（事挙）、

三二五三(辞挙)、三二五三(言上)、三二五三(ク)——小字右寄せの書き重ね。原文書き分けている。⑩四一二四(許登安気)。自分の考え、意志などを言葉に出してはつきり言い立てること。⑪。不必要なまでに高言すること、言わでものを口に出して言い立てること(をする)。

言に(し)あり ④七二七(事二思安利家理)、⑦一三三二(事西在来)、一一四九(事二四有家里)、一一九七(言二師有来)、一二二三(事西在来)、⑨一七七四(言尔有者)、⑫二九一五(言尔有鴨)。初めの五回は、名ばかりだ、言葉の上だけだという感慨を表している。

言勞し ⑩四二二(語)。「誰が言を勞しとかも」⑬三三三九。忝い、過分だ、大切だ。

言に出づ 「言に出でて」 ⑩二二七五、⑪二四三二、⑰四〇〇八(許登尔伊泥弓)。

「言に出」 ⑭三四六六(許登尔豆)。

「言に出にしか」 ⑭三四九七(已登尔弓尔思可)。

言づ 「V言出づ」「言出し」 ④七七七六(事出)。「言出でつる」 ⑭三三七一(許知弓都流)。

言に(は)言ふ ④六七四(五十戸常)、⑪二五八一(云者)、⑫三一一三(要管)。尚、集中、「いふ」の原文は、表意文字では筆者に見落しがなければだが、「云」が一〇一回で最も多く、次に「言」の七〇回、後は「曰」九回、「謂」が③二二七、④六二〇、六八三、⑬三二六三の四回、「要」が⑫三一一三、三一一六の二回、「語」が④五〇三、「併」が⑦一三三九のそれぞれ一回である。「ありといへど」の⑦一三〇七(雖在)、⑪二四七六(雖有)には「雖」(いえども)が使われている。

「云」は、口ごもつて声を出す。転じて、ものをいう。「言」は、ことばをはつきり発言するという。ものをいう。「曰」は、発言の内容を紹介して「:とという」の意。「謂」は、だれかに向かつて、または何かを評して、一般的にものをいうこと。「語」は、相手と話し合うこと。⑩。「要」は、契る、約束する、の意。「広雅」(釈言)に「要、約也」とある。⑩。「併」は、褒めて言うのであろう。尚、実に興味深いことに「言」が「我(われ、わが、あが)」と訓むのに使われているのが、例えば、⑩二二二九、⑪二五三三、二五三四、二五三五、に見られるが、

これは「詩經」で自称の言葉として用いられているものである。正に「我言う、故に我あり」の趣である。

言の忌み ⑬三二八四（禁）。言葉に関する禁忌。

言愛し ⑩二三四三。いとしい言葉なのである。

言そ多し ⑪二五七六（事）。噂が実に高く上がる、という慨嘆。

言思はず ③三二二（辞）。歌を案じ練る。尚、「思ほしき言も通はず」⑰三九六九（於母保之吉許等）、「思ほ

しき言も語らひ」⑱四一二五（於毛保之吉許登）、もある。

言そ思ほゆ ⑨一七四〇（事會所念）の「事」は、言い伝え、伝説。

言の畏し ④六八三（恐）。うっかり物を言うこと恐ろしい。

言も語らふ ⑱四一二五（許登母加多良比）。心中で願っている思いを言葉にして語り合う。⑨一七四〇（事毛告良比）の「こと」は事情、事態であるう。

言は「の」通ふ ④七八九（事）、⑦一一七三（事）、⑧一五二二（事）、⑨一七八二（往來）、⑫二九五五（事）、

三一七八、⑰三九六九（許等毛可欲波受）、⑱四二二四、⑳四三三四（已等母加由波牟）。便りが、言葉が往き交うのである。

言の通ひ（名詞） ⑪二五二四（事）。

言を聞く ⑦一二五八、⑪二八一。文字通り言葉を聞くのである。

言清し ④五三七（事）。淡々と、あつさりと物を言う。

言隠る ⑧一四五六。言葉が籠る。

言幸く ⑬三二五三。予祝する言葉どおりに無事、平穩に囚。

言先立つ ⑩一九三五（事）。最初に言葉をかける。

言さへく ②一三五（佐敵久）。カラ（韓）の枕詞。同じくカラにかかる枕詞にサヒヅルヤがあり、それはサヘヅルの古形、意味不明の言語を操ることを表す。このサヘクもサヒヅルと同源であろう囚。②一九九（左敵久）。

ここは百済の枕詞。

言繁し 噂や評判が騒しい、うるさい。

「言(の)(こそ)繁き」④六二六、六四七(事)、七三〇(事)、⑧一五一五(事)。

「言の繁けくむ」⑦一三八八、⑩二三〇七(事)、⑪二三九七(事) 二四三九(事)、二五六一(事)、二六二一、二七二八、⑫二八四八(事)、三〇七八。

「言繁くとも」⑪三三九八(事) / 「言繁み」⑧一四九九(事)、⑩三三〇五(事)、⑬四二八一(辞)。先刻の「人言」「人の言」の「繁し」という作品を合わせると巻四は十二首、巻十一は十首、巻十二は十三首で、この三巻に、人の口が煩いと慨嘆する作品が多い。

言を下延ふ ⑨一七九二(辞)。言葉を表面に出さず心の奥深くで思う囚 のである。

言しみ ④七八八(事重三)。人の噂がかしましいので。

言知る ⑦一〇九六(事)。この「事」は大昔の物語、伝承。⑬三二七九(事)。

言痛し(「こと甚し」)からの変化(一) 噂がやかましい(二) 甚だしい、大げさだ、ぎょうさんだ囃。

「言痛かり」⑪二七六六(乞痛)。「言痛かり」⑭三四八二・或本歌(許等多可利)。

「言痛く(は)(も)」②一一四(事)、⑦一三四三(事)、⑩三三二二(言多毛)、⑪二五三五(事)、⑫二八八六。

「言痛み」②一一六(許知痛美)、④五三八、七四八(辞)、⑫二八九五、二九三八(毛人髪三)——この原文(毛人髪は毛人(蝦夷)の髪の毛深いさまから一杯あることを表すのに借りた戯書囚。『萬葉集』に出現する「言痛し」の十二例のうち、⑩二三二二、⑪二五三五の二例は「仰々しい、大げさな」の意だが、他は全て、

人の噂がやかましい、の意である。

言絶ゆ 音信が途絶える。

「言な絶えそね」⑦一三六三、⑭三三八〇(許登奈多延曾祢)、三三九八(ク) / 「言な絶え」⑭三五〇一(許等奈多延) / 「言は絶えずて」⑫三〇七四(事) / 「言は絶ゆとも」⑭三三九八(許等波多由登毛) / 「言も

絶えたり」⑫二九五九。

言絶えて（副詞）④七四六（事）言語に絶して。

言立つ⑬四〇九四（許等大弓）、⑳四四六五（許等太弓氏）。言葉に出して言明する囚。「立つ」——神仏に対して願いごとなどを条件を添えてはつきり言う圖。

言立て（名詞）⑬四〇九四（立流辞立）、四一〇六（多都流許等大弓）。言葉での誓い。

言の官⑭四〇九四（許等能都可左）。誓いを守り続ける官職、官位にある者。

言（も）（だに）（だに）も告ぐ③四四五（事）。⑩一九九八（事）、二〇〇六（事）、二〇一一（事）。⑰四〇一一（許等：都気受）。

「言も告げ来」④五八三（事）。

言告げ（名詞）「言告げもなき」⑪三三七〇（事）。「言も告げなく」全註岩注釋摘、「言も告らなく」新圖、の異訓によれば「告ぐ」は動詞となり、後者によれば「言告る」が新たに「言」の姿として増える。

言告げ遣る

「故郷の奈良思の岡のほととぎす言告げ遣りしいかに告げきや」⑧一五〇六

「都辺へに行かむ船もが刈り薦の乱れて思ふこと告げ遣らむ」⑮三六四〇（許登都尋夜良牟）

「天飛ぶや雁を使ひに得てしかも奈良の都に言告げ遣らむ」⑮三六七六（許登都気夜良武）

囚は、後の二首は、「言伝て」（⑰三九六二）と同義の複合名詞「言告げ」を「遣る」と読むようであるが、三首共、同じく「言告げ遣る」は動詞と見ることは出来ないだろうか。「告げ遣る」⑳四四〇六、㉑四四一二。「言ひ遣る」④五四三。「相言ひそむ」⑪二二八〇、⑫三二二〇。「言ひ継ぐ」③三二七、⑤八一三（他、多数）などの動詞がある。

言尽く⑳四四五八（己等都奇米也母）。「言尽きめやも」言葉が尽きようか。幾ら語っても語り尽きない、という親愛の情を表明。

言尽くす ④六六一(事)、⑩三七九九(事)。言葉を一杯並べたてる。「周易」繫辞上伝にも「言は意を尽くさず」とあるように、言葉というものは幾ら並べ立てても思いを述べ尽くすことは困難なものであるが、それだけに聞く側は一杯言葉を並べ立てて欲しいものなのである。

言伝つ ⑬三三三六、⑰三九六二(許登都氏夜良受)。この後者「問使ひも遣るよしもなし 思ほしき言伝て遣らず」を、「言伝て」(名詞)「遣る」と囚が読むことは先述したが、團は、「伝つ」(動下二)の用例に、この簡処を挙げる。「思ほしき言」伝て遣らず「だと思ふ。尚、

「言ひ伝つ」の例、「神代より言ひ伝て来らく そらみつ大和の国は……」⑤八九四、がある。

言咎め ⑫二九一二(事害目)、二九五八(言害目) 言葉での咎め立て。

言も咎む ⑨一七五九(事)。

言疾し ⑪二七二二(急)。言葉が激しく、けたたましい。

言問ひ(名詞) ⑤八八四(己等騰比)、⑩二〇六〇(事)、⑬四一二五(許等騰比)、⑳四四〇八(シ)、四三九八(言語)。

言問ふ ③四八一(辞)、④五三四、五四六、六〇二、六三七(事)、七七三(事)、⑤八一(許等々波奴)、八一(許等騰波奴)、⑥一〇〇七、⑦二二一一(事)、⑧二七五九、⑨二五一六(事)、⑩二九三四(事)、三二四三、三一八七、⑬三三三四、三三三六(語)、⑭三五一〇(許等杼比)、三五四〇(許等登波受)、⑰四〇〇六(許登騰比)、⑱四二六一(言等波奴)、⑳四三九二(己等刀波牟)。物を言う、語り掛ける、語り合う、言葉をかける、問いかける、意。

名詞形も含めて、全部で二十七回の「言問ふ」のうち「言問はぬ」という状態を表すのが十五回であり、「言問ひ」が乏しかった、「言問ひ」しておけばよかった、どうすれば「言問ひ」できるか、など、実際は「言問ひ」しなかったものが三回なので、否定の意味合いが肯定の二倍の割である。否定形によって一層、語り合いたい、言葉を掛けたいという願望の強さを窺わせる。②一六七は、「御言問はさず」であった。

言義し ⑧一六一一(事乏)。ここの「ともし」は、心惹かれる、慕わしい、珍しくて飽きない、の意。  
 言の慰 ④六五六(名具左)、⑦二二五八(事之名種)。相手の心を落ち着かせるための気休め、心を慰めるもの。

言成す ④五一二(事)、⑦一三二三(事)、一三二九(事)、一三七六、⑭三四五六(安乎許登奈須那)。「我を言なさん」(三回)「我を言なすな」「言なさむかも」の形だけである。とやかく言う、言い立てる、騒ぐ、噂する、うっかり口外する、など、心中の思いを言葉にする、のが「言成す」で、私(たち)のことをとやかく噂するのだから、しないでくれ、となる。

言成る ⑨一七四〇。話が成立する。「たらちねの母に障らばいたづらに汝も我も事そなるべき」⑪二五一七(事)、は、事態が、二人の結ばれる話が水泡になるだろう、というもので、こういう「事」は、そのまま「事」でもあろう。

(八十)言の上 ⑭三四五六(許登乃敷)。あれこれと仰山な噂。

言葉 ④七七四(練りの言羽)、⑫二八八八(人の辞)、二九六一(常の辞) / 言葉(東国形) ⑳四三四六(氣等婆)。尚、「松陰の浅茅が上の白雪を消たずて置かむ言者可聞奈吉」⑧一六五四、の結句「ことはかまなき」の「言者」は「言葉」で、呪言のような意味に用いているか、とする説がある。④が、現今の通説(らしきもの)は「言」は「事」で、「何か方法はないものか」である。

言は果たす 「ことは果たさず」③四八一(事)。言葉もむなしく。

言をろ延ふ ⑭三五二五(許等乎呂波敷而)。「延ふ」(動下二) (一) 引きのばす。張りわたす。(二) 思いを及ぼす。心をかける。⑭「をろ」は、「息の緒」「年の緒」などの「緒」(糸、紐、↓長く続くもの、絶えないもの) + 接尾語口で、「心の緒ろ」⑭三四六六、のような「をろ」で、言葉の緒ろを張りわたす、心を及ぼして↓言葉を長くかけ続けて、という意味になるのだろう。「言をろ」は名詞ではなからうか。「辞緒下延」⑨一七九二、がある。



## 歌

言速し 「言を速みか」⑩二四五九（急事）。噂がいよいよ激しいからでしょうか。

言に優す 「言にまさめやも」⑮三七六三（許等尔麻左米也母）。「優す」は「まさる」。この中臣朝臣宅守の

「旅といへば言にそ易きすべもなく苦しき旅も言にまさめやも」は

旅と口に出して言えば、言葉の上では容易だ、「だが、それなら、実際の旅は言葉のように容易でない苦しきものだとすることにならうが、だからといって、この」どうしようもない「今の」苦しき旅も「旅」というその容易な単なる「言葉より優つて苦しきものだろうか」「いや、そんなことはない。言葉に出しているよりは容易なのだ、そう思うことにしよう、もつと苦しき旅だつてある筈なのだから」

と、自らを慰め奮い立たせようとしている自己励起の作品である。丁度ここより二十首前に

「旅といへば言にそ易き少なくも妹に恋ひつつすべなけなく」⑮三七四三

と詠つて、旅と言えば言葉の上だけの容易なこと、少しばかりあなたを恋しく思つてどうしようもないでいるなどという程度ではない、と、この旅の苦しさを訴えて狭野弟上娘子に甘えた宅守だったが、今度の作品では、どうしようもない現実の苦しき旅も、容易な言葉の上だけの旅より優るわけではないのだ、と自らに言い聞かせているわけである。

どうしようもない苦しき旅も、「旅」という言葉以上のものだろうか——いや、そのようなことはない、旅には違ひないのだ——「所詮は旅としか言い表しようがない」⑯、「旅としか言い表しようがない」⑰、ということにはなるのだろうか、「言にまさめやも」のような甚だ含蓄に富んだ結句の「現代語訳」が全く同一なのは面白い。同じ「読み」をした、ということだろうか、同一でも「所詮は」などを敢えて入れなかつた禁欲的な潔癖という点で、本稿は、⑱の「訳」（の態度）を買いたい。それにしても、「言にまさめやも」は「表現に忠実に解釈すれば、苦しくてたまらない現実の旅暮しが、在り来りの抽象的概念としての「旅」という語よりも気楽だ、ということになって、意を得ない。恐らく宅守の誤用であろう」⑲は、どうも解せない。反語は飽くまでも反語

なのであって、「マサメヤモ」は「マサラジと同じく」**困**にはならない。何とかして苦しさに堪えようとする思いを籠めに籠めた表現であつて、先刻敢えて冗言したように、「意を得ない」どころではない。誠によく意を得る、思い察するに余りある表現であらう。「宅守の誤用」などでは、まず、なからう。だから、態々、言葉にすれば易しいが、と言ひ、結句を敢えて反語にしたこの作品の「思い」は、「旅としか言い表しようがない」では、些かならず消えてしまうのではあるまいか。それではずいぶん冷静であり、諦念すら伝わらないばかりか、増して自分で自分を無理に励まそうとしている思いなどは、とても表れないだらう。この作品、抽象的な言い廻しではあるが、籠められている想ひは深く、なかなかの佳作と見たい。

言(をし)待つ ⑪二四四〇(事)、二七五五(辞)、二七七〇、二七八二。相手の言葉を待つ、というこの表現は、卷十一、にしか現れない。

言を満つ ⑬三三二九。「天地に言を満てて恋ふれかも」(天地満言)。逢いたい思いを天地に満ち溢れる程に何度も言挙げして**困**。

言向く ⑭四四六五。「ちはやぶる神を言向け」(許等牟氣)。言葉によつて随順させること。実際には多少の武力行使が含まれる場合が多い**困**。

言申す ⑯四三七六。「言申さずて」(己等麻乎佐受弓)。しかるべき言葉をかけずに。

言持つ ⑰一四五七、⑱二七九七(以)。言葉を抱き持つ、言葉に以(る)氣持ちを持つて。御言(を)持つ⑳一一三、㉑四〇〇六、「御言持ち」(美許登母知)——**困**は「命」<sup>みこと</sup>。天皇の命令、仰せ。「家言持ちて」㉒四三三三。

言にそ易し ⑳三七四三(許等)、三七六三(許登)。共に「言にそ易き」(夜須伎)の形で、先刻触れた中臣朝臣宅守の歌に現われる。

言の故 ㉓三二八八。この「故」は「故障、さわり」**𪛗**、「事故、災難」**困**で、言葉の災い、崇り。

言許す ㉔一一九三(事聴)。相手の言葉を承諾する、聞き入れる。

言寄す ④五四六(辞因)、⑩四一〇六(許等余勢天)、言葉によって協力する、加護する因。⑦一一〇九(縁)、ある男女を互いに関係あるものとして噂する因。「言寄せ妻」(言縁妻) ⑪二五六二(いい仲だとその関係を噂されている妻)、なる素晴らしい造語もある。

言の宜しさ ③三三九。言葉の見事さ、素晴らしさ。

尚、「言のみも」③四三二——葛飾の真間の手児名の話だけにしろ。「言のみを」④七四〇(事)——言葉だけは後に逢いませうなどと優しそうに。「言こそば」⑫二九九六(事)——実意の籠った真実の言葉こそ。共に「言」を強調している例として抽出した。

\*

以上、「萬葉集」に現れる「こと」のうち、事柄、事象、事情、事態などを表す「事」ではなく、言語行為に關わる「言」を、出現順に抽出して、ほぼ五十音順に些かの整頓を試みたが、前者の「事」も、

「事は定めむ」③三九八、「世の事なれば」③四八二、⑤八〇五、「事もなく」④五五九、⑤八九七、「事計り」④七五六、⑫二九〇八、二九四九、二八九八(量)、⑬三三七、「慰もる事もありや」⑨一七五七、「すべなき事」⑪三三六八、「事は定めつ」⑭三四一八、

等々、色々現れるが、「言」の数には及ばない。既述のように、「言」が「事」と原文で表記されるものは多いが、「事」の方も「言」と表記されている例は

「言しもあるごと」④六四九、「要ひし言もあらなくに」⑫三一一六、などあり、

「天地に悔しき事の 世の中の悔しき言は」③四二〇、のように

いずれも「悔しい事態」だというのを「事」「言」と文字を変えて表現している例もあって、「芸」(?)が細か

い。  
 思うに我々人間は、「言」を口に「出」して「言」いながら「告げ」ながら「言」を「問」い合い「通」わせながら生きてゆくものであり、「言」は「絶」えては困る存在なのである。「言」を「尽」し、心を尽しながら生きて来たのであった。この両者（言を尽し、心を尽す）の表現は、共に『萬葉集』には印象深くしっかり現れるのである。

「言」が様々に現出する回数が多いのは、前記の表でも明白なように、巻の四、十一、十二、であり、いずれも三十例を越して殆ど同じ位であるが、実に面白いことに、それは「心」なる語が作中に現れる回数が四十例以上と最も多い巻、四、十一、十二と、全く平行していることである。<sup>6</sup>『萬葉集』全体を見渡しても、「心」なる語と「言」表現の出現回数は、各巻で、「心」が多い巻は「言」も多く、「心」が少ない巻は「言」も少ない、という具合に、大略、平行しているのが観察される。これは実に興味深いことではなからうか。「言」の字義は「口から出る心」（加藤常賢『漢字の起源』角川書店）であった。

詩歌は、「心」を「言」によって形象化する営為であつてみれば、無論その営為は、「心」なる語や「言」表現を作中にそのまま使用したりしないで成される場合が遥かに多い筈であるけれども、この本邦最古の形式・内容共に驚くべく多彩で多種多様な詩歌集に見られる「心」と「言」表現の実態は、詩歌の本質を实によく象徴していると言つても過言ではあるまい。

『萬葉集』開卷劈頭の作品は、籠と「ふくし」を持つて岡辺で蔬菜類を摘むという「予祝のための行為」<sup>7</sup>に励む少女を見かけて、身分を名を明かせと促し、自分の方からそれを明かそうと詠いかけた雄略天皇の歌だというものである。言葉を自ら「告」り、言挙げしようとはまったこの詩歌集は、以後、四千五百余首に互つて多彩に「言」と「事」とを連ねた挙句、新年の正月の今日降るこの豊年の瑞兆である大雪のように、更にもつと良い事が積れかし、「いやしけ吉事」と希求する大伴家持の「予祝的な意味をもつた」の言挙げによつて、結ばれる。詩歌の当然といえは当然ながら、言挙げに始まり言挙げに終る、それが、『萬葉集』であつた。

1、以下、本稿での主たる参照文献とその略記。

- 〔全註〕 萬葉集全註釋 武田祐吉 十六冊 改造社・昭二三〜六／増訂版 十四冊 角川書店・昭三一〜二  
 萬葉集私注 土屋文明 二十冊 筑摩書房・昭二四〜三一／新訂版 十冊 昭五一〜二  
 萬葉集（日本古典文学大系）高木市之助・五味智英・大野晋 四冊 岩波書店・昭三二〜七  
 〔注釈〕 萬葉集注釋 澤瀉久孝 二十冊 中央公論社・昭三二〜四三  
 〔小〕 萬葉集（新編日本古典文学全集）小島憲之・木下正俊・東野治之 四冊 小学館・一九九四〜六  
 萬葉集（日本古典集成）青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎、五冊 新潮社・昭五一〜九  
 萬葉集（完）日本の古典）小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 六冊 小学館・昭五七〜六二  
 〔新校〕 新校萬葉集 澤瀉久孝・佐伯梅友 創元社・昭四七  
 〔稿〕 萬葉集・本文篇 佐竹昭広・木下正俊・小島憲之 塙書房・昭三八  
 萬葉集 鶴久・森山隆編 桜楓社・昭五九  
 〔校〕 萬葉集 上・下 伊藤博校注 角川文庫・昭六〇  
 〔角〕 例解古語辞典 小松英雄主幹編 三省堂 第三版・一九九二  
 〔漢〕 学研漢和大典 藤堂明保編 学習研究社・昭五三

2、なお、「大君の命おほきみのみこと恐おそみ」という慣用句が頻出するが「みこと」はお言葉、御命令、である。恐れ多い、の意だが、この慣用句は、集中次の二十七回（因は二十八回と指摘するが、「恐おそきや命みこと被かり」②〇四三三二一、を「大君の命恐おそみ」に同じ、と記しているのでこれを加えているのだろうか）である。①七九、③二九七、三六八、四四一、四四三、⑥九四八、一〇一九、一〇二〇、⑧一四五三、⑨一七八五、一七八七、⑬三三四〇、三三一九一（或本）、三三三三三、⑭三三八〇、⑮三六四四、⑰三九九三、四〇〇八、⑲四二二四、⑳四三二八、四三五八、四三九四、四三九八、四四〇三、四四〇八、四四一四、四四七二。

3、作中での「いふ」の意味が、原字で書き分けられているかどうかだが、「曰」は「…という」のところに使われている。そうであるが、「云」と「言」は、原字でも厳密な書き分けは無理かも知れず、集中でも意識的な使い分けは殆どなされていないように見うけられる。

4、例えば、「言告師氏 言告言婦」(周南・葛覃)の各行頭の「言」は、毛伝も鄭箋も「我」と読む。「彤弓弘弓 受言藏之」(小雅・彤弓)は毛伝が、「弋言加之 與子宜之」(鄭風・召鷄鳴)は鄭箋が、それぞれ「言、我也」。その他「運物之泄也 言與之偕逝之謂也」(莊子・山木)は、陸徳明が「言、我也」。(『康熙字典』、『漢語大字典』第六卷、『經典釋文』参照)

先の「言告師氏」の「言」を「しばらくそれ「毛伝」に従わない」として「句のはじめに來る無意味な助字。詩經のなかの言の字はおおむねそうである」という吉川幸次郎注『詩經国風』上・下(中国詩人選集・岩波書店)は、しかし、国風百六十篇の中に出てくる総数六十九箇の「言」のうち半数以上の三十八箇を「我」と読む。

「爾雅」釋詁下は、「叩、吾、台、予、朕、身、甫、余」と共に「言、我也」とする。

「文(体)は人なり」(ビュフォン)というが、人は何を如何様に「言」うかによってその「人間」をさらけ出すのだから「言」によって「我」は現われよう。「我思う「考う」、故に我あり」(デカルト)に対して「我言う、故に我あり」だとすれば面白いのだが、「我」と同音音であるので言と読み、一人称に使われることもある(吉川幸次郎同、上・三六頁)。同子音という理由だけではとても満足できないが、最近の優れた人稱の研究書とされる周法高『中国古代語法・稱代編』(中華書局出版・一九九〇)は、「言」が「我」の意になるなどとは全く触れていない。

5、「萬葉集」の「現代語訳」というのは、古代の大和言葉という一種の外国語を、現代の日本語に(翻訳)することに等しいが、(翻訳)というのは飽くまでも(翻訳)なのだから、文芸作品の場合には特に、訳者の作品解釈を訳語自体に、原文にはない語句を使って言葉として入れ込むことは、極力控えたいものである。訳者が当該の作品を十分に解釈できているのは当然であり、その十全な解釈を「訳」に盛り込みたい気持は分りすぎる程分るが、訳者自身の「解釈」を讀者にそのまま押しつけることになる「訳文」「訳詩」にならないように心しなければならぬだろう。訳者の解釈は、別に注なり論文なりで示せばよい。(翻訳)は文芸作品の場合には、外国語を外国語のまま日本語とし

て提供する、という実際には殆ど不可能なことをするのが、翻訳者の仕事だと思われる。最小限の語句で現代語訳を試みているという点で、**四**は、潔癖すぎる程である。

6、本誌前号31の拙稿、「萬葉集」の〈こころ〉と〈つま〉たちを参照されたい。本稿はそれと対になるものである。「心」と「言」表現の出現数を表にしておこう。

心		「言」表現		卷
例数	作品数	例数	作品数	
7	6	0	0	1
11	10	11	8	2
18	17	14	10	3
41	39	39	33	4
7	6	5	4	5
3	3	2	2	6
23	23	20	18	7
15	15	7	7	8
11	9	9	6	9
18	18	11	11	10
44	44	33	30	11
42	42	35	31	12
27	24	18	12	13
14	14	17	15	14
10	9	5	4	15
7	7	3	2	16
22	17	10	7	17
17	14	8	4	18
18	14	11	7	19
16	15	11	9	20
371	346	269	220	総数

卷一の八十四首は、「言」表現が作中になくても十分に「言挙げ」している作品だということだろうか。

尚、前号拙稿への補遺。

「霊合者相寝るものを小山田の鹿猪田守ること母し守らずも」**⑫**三〇〇〇

の初句を、底本は（元暦校本も**四**）コ、ロアヘバと訓んでいたのをうっかり見逃して、現在の定訓のようになってくるタマアヘ「ハ」バ、を採って「心」の中に入れなかつた。ココロの例が増えるのを喜んで、「霊」をココロと訓むことにし、前号の表に付加したい。ココロと訓む原文が「霊」の一字増えることになり、「心」の数と作品数が一つ増える。右の表にはそうしてある。尚、**四**が、ただ一本だけが広瀬本に「意合者」と作っているのを採用して、

この作品の初句を「意合者」と改訂してココロアヘバと訓んでいるのは誠に嬉しい。これも前号では遺憾ながら見落とした。因に依れば「意」のココロが一つ増えることになる。

7、8、 白川静「詩経 中国の古代歌謡」 中公新書 一九七〇。一〇二、一〇一頁。

萬葉学に関して筆者は、日頃折りに触れては、同僚の畏友 芳賀紀雄教授に、また、中国文学関係では同じく向嶋成美教授に、何かにつけて教示を仰いでいるが、本稿を初めとする拙稿の誤謬、不備、不行届等の責任は全て専ら筆者一人に帰すること、無論である。尚、本誌前号と本号の拙稿は、その極く一部を、それぞれ「楡」ELM（細川謙三主催）の第六十六号（一九九三年十一月）と第八十四号（一九九六年十一月）に発表した。

附記

最終校正時に左記の燃犀緻密な論考の存在を知った。筆者の不明により知るのがおくれで間に合わず、言及できなかった。

内田賢徳「萬葉の言」コト「萬葉」（萬葉學會）百二十三号（昭和六十一年二月）二三—五九頁。